

事実は小説よりも奇なり、という言葉を最初に使った人は、何を見て、あるいはどんな体験をしてそう言ったのだろうか。

——ふと、そんな事を以前プロデューサーさんが話していたのを思い出した。

その時の私はいつもの癖で、元となった一節が書かれた本の事や、その著者の事を話していたような気がする。

普段はそんなに話さない私がすらすらと話すのを見て、プロデューサーさんは少し意外そうな顔をしていたけれど、聞き終わった時に「文香はよく知っているな」と言ってくれたのが少しだけ嬉しかった。けれど、同時に反省というか自己嫌悪というか、そういう気持ちも湧いてきて、私は顔を俯かせてしまう。

読んだ事を、知った事を、そのまま話す。それはおおよそにおいて事実ではあるのだけれど、それ以外のなものでもない。

そこに鷺沢文香という個人はどこにも無く、言ってしまうえば辞書を朗読しているようなもので、これで相手を楽しませる事が出来るかといえば、答えは火を見るよりも明らかだろう。

人と話すのはどちらかといえば苦手ではあるけれど、嫌いという訳ではない。でも、いざ話すとなると何を話せばいいのか解らない。

私はそんな自分があまり好きではなかったのだけれど、かといって中学や高校の頃に見た、クラスを中心にいる子達のように明るく振る舞うなんて事は、想像の中でさえ出来なかった。

変えようと思った事がない訳ではない。
変わりたいと願った事がない訳ではない。

とはいえ、日常生活を送る中で特に不都合はなくて。叔父さんの店を手伝うようになってからも、お客さんとのやり取りくらいは出来たものだから、いつしかすっかりと諦めてしまっていた。

このまま何事もなく、この先も静かに生きていくのだろう……と、そんな風に漠然と思っていた。そして思っていた事さえすっかり忘れてしまった頃に、あの人は私の前に現れたのだ。

☆

「暑……」

瞳を隠すくらいに伸びた前髪もこの日差しを遮ってはくれないようで、思わず私は眼を細めた。

夏も真つ盛りといったこの季節。見上げた空には大きな入道雲が首を伸ばしていて、どこからか聞こえる蝉の声が感じる温度を益々上げる。

天気予報では今日は平年並みの暑さだと言っていたけれど、冷房の効いた電車から一步降り立った駅のホームは、気温以上の暑さを感じさせた。

それでも屋根の下、日影に入ると幾分暑さはマシになる。私は他の人の邪魔にならないように中程まで移動して、ハンカチで汗を拭いたところでほう、と一息。

——暑いのは苦手だ。

この時期になると毎年そう思うものの、今日も服装はほとんど肌を露出させないようなもの。とはいえ、これでも出来る限り薄くしているつもりなのだ。

街中で見かける自分と同年代であろう女性は脚や腕、更にはお腹まで出している姿を見かけるけれど、自分は絶対にそんな格好は出来ない。

人と話すのが苦手で、見るのも見られるのも苦手で。

親が言うには赤ん坊の頃から大人しい性格だった私は、いつからか人の視線から隠れるように、あるいは逃れるように前髪を伸ばして、肌を隠すようになった。

「でも……アイドルって……」

夏。アイドル。グラビア。水着。

アイドルという仕事に対してほとんど知識の無い自分でも、流星にそれくらいの事は知っている。

とはいえ。

「……私には、関係ないですね」

今はまだ仕事が貰えるような立場ではないし、仮にデビュー出来たとしても、自分の水着姿

「——以上で今回のオーディションは終了です。合格された方には後ほどそれぞれ所属事務所に詳細を連絡させていただきますので、よろしくお願ひします」

そう言つて審査員の一人がマイクを置くと、それまで張り詰めていた場の空気がふつと和らいで、途端に周りがざわつき始めた。

今回の参加は十五組。ユニットで参加していた人達や、ソロでも同じ事務所から参加していたのであろう人達が、思い思いに語り合っている。

オーディションの最後。審査員にエントリナーナメンバーを呼ばれた——つまるところ合格者は三組。

さも当然といったようにスタジオを後にする人。溢れる喜びを隠すことなくハイタッチをする人。感極まつて泣き出してしまい、ユニットのメンバーに宥められる人。

三人、ではないけれど三者三様の合格者。それは、残りの人達——私を含めた不合格者の方もまた同様だった。

何が足りていなかったのかを話し合う人。次こそはと情熱を燃やす人。項垂れたままスタジオを出ていく人。ぺたんと座り込んだまま動けない人。嗚咽を漏らす人。

千差万別。十人十色。

とはいえ、やはり大きく分ければこの場に流れる空気は二種類だけで、それは合格者と不合格者という、絶対的な差だった。

そして、私はといえば。

「……………はあ」

短く一息ついて、先に出ていった人達と同じように、スタジオを後にする。そのまま隣のロッカーームへと移動すると、入り口の所で丁度中から出てきた人とばったりと会ってしまい、咄嗟に道を譲ってしまった。

オーディションが終わっているの一番にスタジオを後にした、合格者の一人。名前までは生憎と覚えていないけれど、あまりテレビを見ない私でさえその顔を知っているのだから、きっと有名な人なのだろう。

まだ余韻に浸る人が多い中で颯爽と帰り支度を済ませる辺りからも、慣れというか貫禄というか、そんなものが窺える。

「お疲れ様です」

「あ……お、お疲れ様、です」

すれ違い様に軽く頭を下げられて、私も慌ててお辞儀を返す。

まさか声をかけられるとは思っていなかったの、少し声の上擦ってしまった。けれど彼女はそれ以上何も言わず、スタジオを後にした時と同じように、しっかりとした足取りで私の前から去っていった。

「……やっぱ、ああいう人をこそアイドル、というのでしょうか」

合格した人もダメだった人も、やはりアイドルという職業柄かとても綺麗な人達ばかりだった。

その中でも一人別格だったのが今すれ違った彼女で、凜とした佇まいと、よく伸びるどこまでも届きそうな歌声、そしてそこから溢れる輝きに私もすぐに魅了されてしまった。

「渋谷さん、みたいな人ですね……」

同じ事務所に所属する年下の先輩の事を思いながら、私は改めてロッカールームに入った。

ロッカールームの中には先にスタジオから出ていた人達が何人かいたものの、まだほとんどがスタジオに残っている所為か、もしくは落ち着いた人から引き上げてきているからか、その空気はあちらに比べれば大分大人しいものだった。

話し声もほとんどなく、着替えたり荷物を片付けたりする音だけが聞こえる室内。

私も着替えようとジャージのポケットに手を入れて、しかし突然鳴り響いたパン、という大きな音に取り出した鍵を落としてしまった。

「よし！」

何事かと見てみれば、何個か隣のロッカーを使っていた人が、気合いを入れるように声を上げてぐつと拳を握り込んでいた。

その赤くなった頬を見るに、先程の音は彼女が自分の頬を叩いたものだったのだろう。

それは先程見ていた、項垂れたままスタジオを後にした人だったのだけれど、反省や後悔な